

『枕草子』における白居易と元稹の詩的な形象

——「蚊の細声」と「蚊の睫」を中心に——

張 培 華

要 旨

清少納言と紫式部では漢字・漢語の使い方が異なる。例えば、小さい虫の蚊は、膨大な『源氏物語』には見えないが、『枕草子』において蚊は二箇所ある。一つは、「にくきもの」の章段の「蚊の細声」である。もう一つは、「大藏卿ばかり耳とき人はなし」の章段の「蚊の睫」である。清少納言の面白さが見える。蚊の細声は憎らしいが、大藏卿の耳は素晴らしい。なぜなら、極めて細い蚊の睫が落ちることが聞こえるからである。これは清少納言の独特な発想と言えよう。本稿では、漢詩文受容の視点から、清少納言の蚊に対する「細い」の表現は、実に白居易と元稹の詩的な形象と一致していることを明らかにした。

一 おおむね

『枕草子』における白居易と元稹の詩の享受については、すでに多くの業績が蓄積されている。しかし、まだいくつかの章段において元白詩の受容を指摘することが可能であろう。例えば、「蚊」については、『竹取物語』、『土佐日記』、『落窪物語』、『源氏物語』、『紫式部日記』などの仮名文学では登場しないが、『枕草子』には、「蚊」に関わる表現が二箇所見られる。

一つ目は、「にくきもの」の章段の「蚊の細声」、もう一つは、「大蔵卿ばかり耳とき人はなし」の章段の「蚊の睫」である。これらの「蚊」に対する「細い」の表現は、清少納言の独特な発想と言えよう。

一方、白居易と元稹の詩では、特に「蚊」に関する「微細」や「蚊睫」が、清少納言の描写と重なるようである。また、『江談抄』第五「詩の事」に見える当代の白居易と元稹の詩集に関連する記事から見ると、一条天皇の宮廷では元白の詩がよく読まれたようである。このことから清少納言が白居易、元稹の「蚊」に関する詩作と無関係であったとは言えないだろう。そこで、本稿では「蚊の細声」と「蚊の睫」に着目して、『枕草子』における「蚊」に関する表現が、元白の詩作に由来したのではないかと考えたい。

二 「蚊の細声」と「蚊の睫」及び問題の所在

まず、『枕草子』「にくきもの」の章段における「蚊の細声」に関する段落を取り上げる。（以下引用文は「新編日本

古典文学全集」による。

ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細声にわびしげに名のりて、顔のほどに飛びありく。羽風さへその身のほどにあるこそいとにくけれ。

(六七頁)

右傍線部の「蚊の細声」は、四系統『枕草子』本文いずれにも見える。念のため、該当する部分を比べてみよう。

三卷 本…蚊の細声(『新編日本古典文学全集』六七頁)

能因 本…蚊の細声(『日本古典文学全集』一〇一頁)

前田家本…蚊のほそごゑ(『前田家本枕冊子新註』一一一頁)

堺 本…かのほそごゑ(『堺本枕草子評釈』九八頁)

それぞれ漢字と仮名の表記は異なるが、「蚊の細声」であることは共通している。この「蚊の細声」に典拠があることは、すでに江戸時代から指摘されていた。例えば、加藤盤齋(一六二一〜一六七四)『清少納言枕草紙抄』(日本図書センター)には、

莊子云、蚊虫嚙膚。間通宵不寐云々、山谷詩云、半夜蚊雷起。西風為解紛。

(一二七頁)

と、出典は『莊子』であると示しているが、厳密には、「蚊」の声についての記述はなく、また宋代の黄庭堅(一〇四一〜一一〇五)の別集「山谷詩」は、清少納言没後の成立である。

北村季吟(一二二四〜一七〇五)は、盤齋の説を引かず、「蚊」のぶんぶんという音が、「蚊」の「文」の「つくり」によると説明する。引用文は、「枕草子古註釈大成」『枕草子春曙抄』(日本図書センター)による。

蚊のぶん／＼となく心也。蚊の字ぶんのこゑなれば也。

（九五頁）

明治以降、今に至るまでの諸注釈は、「蚊」の「音」や「名のり」の面白さに重点が置かれているものが多い。例えば、金子元臣は『枕草子評釈』（明治書院）の中で、次のように述べる（現代漢字で表記する）。

蚊の細声に名のりて、「名のりて」は名を告ることなれども、こゝは只鳴くをいふ。我こゝにありといふやうに聞ゆる故なり。時鳥の鳴くを名告るといふも、その始こそ、名義の起源を思ひて用ゐるもしたれ、この頃は単に鳴くをいふこと、尚水鶏の鳴くを、叩くといひ習へるが如し。蚊の字、ブンの音なればなどいへる説は、拘はれり。

（一三八頁）

田中重太郎も同様で『枕冊子全注釈』（角川書店）では、「蚊」の名前と「蚊」の音についての解釈である。

「蚊」は、『和名抄』に「蚊賀、小飛虫、夏月夜噬人也」とあり、「蚊加阿」〔最勝王経音義〕のように「カア」という発音もあつたらしい。

（二三〇頁）

これら以降の『枕草子』諸注釈も北村季吟や金子元臣の解釈と大差なく、蚊の「名」と「音」に関することしかみえない。

例えば、池田亀鑑・岸上慎二らは「自分の名を言う。存在を告げるなどの意。」（日本古典文学大系・七〇頁）。松尾聰・永井和子らは、「羽音の形容。「蚊」の音読「ブン」から「ブーン」といったとする説、「カー」とする説などがある。「ぶん」と羽音を立てて蚊であることがわかるようにやって来るのを擬人化したものである。」（新編日本古典文学全集・六七頁）。津島知明・中島和歌子らも、「蚊のぶんぶんとなく心也。蚊の字、ぶんの声なれば也」（春）。音

読みが「ぶん。」(新編枕草子・四五頁)。

ただ、渡辺実は、新日本古典文学大系の中で、

蚊だとわかる音を立てるから「名告る」と擬人化した。それが「細声」なので「怪しげに」。

(三五頁)

と、「蚊」を擬人化した表現から「細声」は生まれたとする説を提起したが、「細声」の典拠については検討していない。

以上、「蚊の細声」、つまり蚊に関する「細」の表現に典拠があることについて、従来の解釈で渡辺氏以外に言及されなかった。

もう一箇所「蚊の睫」の表現があることに注目したい。それは「大蔵卿ばかり耳とき人はなし」の章段の「蚊の睫」である。本文は以下の通りである(新編日本古典文学全集)。

大蔵卿おほくらみかぢばかり耳みみとき人はなし。まことに蚊かの睫まつげの落つるをも聞きつけたまひつべうこそありしか。職しきの御曹司みざうしの西面にしおもてに住みしころ、大殿おほどのの新中将しんちゆうぢゆう宿直ととのあにて、物など言ひしに、そばにある人の、「この中将ちゆうぢゆうに、扇あふぎの絵の事言へ」とささめけば、「今かの君の立ちたまひなむにを」と、いとみそかに言ひ入るるを、その人だにえ聞きつけで、「何とか、何とか」と、耳をかたづけ来るに、遠くあて、「にくし。さのたまはば、今日けふは立たじ」とのたまひしこそ、いかで聞きつけたまふらむと、あさましかりしか。

(三八六〜三八七頁)

傍線部の「蚊の睫」の典拠は、江戸時代から『列子』が指摘されてきた。例えば、加藤盤斎は、

列子湯問篇云。江浦之間生麼蟲。其名曰焦螟。群飛而集於蚊睫弗相觸也。〔清少納言枕草紙抄〕「枕草子古注釈大成」日本図書センター）

（六四四頁）

と解釈した。北村季吟も、盤齋と同じように『列子』を踏まえた。以来、現在に至る『枕草子』の諸註釈では、「蚊の睫」の典拠は、『列子』である。

しかし、反論がないとは言えない。例えば、かつて関根正直は、次のように述べている。

◎蚊のまつげの落つる音 **補**例の清少獨擅の警句なり。之を列子湯問篇の文より、思ひつきたる詞として、春抄を始め、夏蔭翁等、列子の文を長々と、引き出でたるは徒勞ならずや。且列子には、蚊の睫落つとは見えざるをや。〔補訂枕草子集註〕思文閣出版）

（五四四頁）

関根正直が指摘されたように、『列子』の「蚊睫」の前後の文脈は『枕草子』の「蚊の睫」の文脈と合わないだろう。『枕草子』では、大蔵卿の耳が優れることを表すために、清少納言が「蚊の睫」の落ちる音が聞こえるという比喩の描写である。従って、「蚊の睫」が落ちる音が聞こえることから、周りは極めて静かな状態と考える。

一方、『列子』の場合、この蚊の睫の周りは軽く細いではなくむしろうるさい状況であろう。

では、『枕草子』における「蚊の細声」と「蚊の睫」の表現の由来は、どのように解釈すればよいだろう。この点を追及するために、まず日本古代文学における「蚊」の表現を考察してみる。

三 『枕草子』前後の文献における「蚊」の表現

日本古代文学における「蚊」の表現は多くない。例えば、『古事記』と『日本書紀』には「蚊」がそれぞれの三箇所しか見えない。ここで両書の各一例を取り上げてみよう。⁽²⁾ 引用文は、新編日本古典文学全集による。該当のページ数を示した。

『古事記』「中巻 開化天皇」

次、袁耶本王者、別・近淡別祖也。^{葛野之梅蚊野也}（後略）

（次に、袁耶本王者は、葛野之別・近淡海の蚊野之別が祖ぞ。）

（二七八～二七九頁）

『日本書紀』「卷第十 誉田天皇 応神天皇」

歲次庚辰冬十二月、生於筑紫之蚊田。^{（後略）}

（歲次庚辰の冬十二月を以ちて、筑紫の蚊田に生まれませり。）

（四六八～四六九頁）

『古事記』の「蚊野」は、日本古代の地名である。例えば、『日本歴史地名大系』によると、「延喜式」神名帳に記す愛知郡三座の一つ軽野神社の訓に古本はカルノとともにカノがあり、同社の鎮座する秦莊町南部の宇曾川流域には蚊野・蚊野外・上蚊野などの地名を残すので、訓はカノで、所在地もこの地域とみてよいと考えられる。『日本書紀』の「蚊田」も古代の地名である。すなわち応神天皇の生誕地とされる地名。

また『風土記』には「蚊」の表現は二箇所見える。一つは「蚊屋」である。もう一つは「蚊嶋」である。⁽³⁾前者は、『延喜式』に見える「蚊帳」のような蚊を防ぐための用具である。後者は、古代の海の中の「嫁が島」という島の名である。⁽⁴⁾

次に『万葉集』では最も多く、八箇所の「蚊」は、すべて万葉仮名として使われている。⁽⁵⁾

以上のように、古代日本の文献では、「蚊」に関する表現は、地名及び万葉仮名を表している。

平仮名が発明された以後、仮名作品では、「蚊」は殆ど見えない。例えば、『竹取物語』、『伊勢物語』、『土佐日記』、『大和物語』、『落窪物語』、『源氏物語』、『泉式部日記』、『紫式部日記』などの作品では「蚊」が見えないが、『古今和歌集』と『蜻蛉日記』及び『宇津保物語』の中には、それぞれ一箇所「蚊」が存在している。確認のため、これらの三つの「蚊」に関する本文を次のように比べてみたい。

(1) 『古今和歌集』卷十一恋歌「五〇〇」番

読人知らず

夏なれば屋戸やとにふすぶる蚊遣かやりり火びのいつまでわが身下したち燃えをせむ

(二〇六頁)

(2) 『蜻蛉日記』「卷末歌集」

蚊遣かやり火、

道綱母 あやなしや宿の蚊遣火つけそめて語らふ虫の声をさけつる

(二七八頁)

(3) 『うつほ物語』「藤原の君」卷（二八）

兵衛佐行政、

蚊遣火の煙も雲となるものを下草をしも結ばざらめや

御返しなし。

(二〇四頁)

傍線を付けたように、「蚊遣火」は、「そもそも「蚊を追いはらうためにいぶす火」であるが、「蚊遣火をたくの意で「燻ゆる」と同音の「悔ゆ」にかかり、また、蚊遣火の火が見えないで燃えていくところから、ひそかに思いこがれる意の「下に燃ゆ」「下燃え」などにかかる」(『日本国語大辞典』)という表現する比喩である。

ここまで確認した如く、仮名文には「蚊」の漢字が見えるが、実際には蚊のことは書かれてなかった。『枕草子』の「蚊の細声」と類似している唯一の表現は、『三宝絵』中巻「十七 美作みまさかのくろがねをとるやまのひと国採鉄山人」の中の「蚊ノコエノゴトシ」である。しかしこれは『枕草子』の典拠とは言えない。なぜなら『三宝絵』の「蚊の声の如し」の中には「細」字が見えないからである。

また『三宝絵』と似ている仏教に関わる漢文で書かれた作品には、いくつかの「蚊」は見られる。例えば、『日本靈異記』には二箇所、『性靈集』には五箇所、『三教指帰』にも一箇所である。ただ『日本靈異記』の「蚊田」(賀太)とも書かれる)は、すでに『日本書紀』に見えたように、古代の地名であるが、『性靈集』の「蚊虻」と「蚊響」及び『三教指帰』の「蚊羽」のような漢語の表現は、先行の研究では、『漢書』や『列子』からの出典が明らかである。

またここで注意したいことは、古代日本人が書かれた漢詩文の中には「蚊」が見えないということである。例えば、『懷風藻』、『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』、『扶桑集』、『本朝麗藻』、『本朝無題詩』、『都氏文集』、『田氏家集』、『菅家文章』、『菅家後集』、『江吏部集』、『法性寺関白御集』、『和漢朗詠集』、『本朝文粹』、『続本朝文粹』等には、「蚊」

は見当たらない。

以上、「蚊」に関する「細かい」表現は、日本古代の文献に見あたらず、中国の詩文から受容されたと考えられる。この点を解明するために、次の節で詳しく考察する。

四 白居易と元稹の詩作における「蚊」の「細かい」イメージ

中国の典籍からみると、まず儒教の經典には、「蚊」が見えない。例えば、『易経』、『尚書』、『詩経』、『周禮』、『儀禮』、『禮記』、『左伝』、『公羊伝』、『穀梁伝』、『論語』、『孝経』、『孟子』などの經書には「蚊」は書いていない。ところが、道教の思想と言われた經典には幾つかの場面で蚊が登場している。例えば、『荀子』には一箇所、『莊子』には六箇所、『列子』には二箇所がある。しかしながら、これらの蚊に関する表現を確認したところ、「蚊」の「細かい」表現は見えない。⁽⁸⁾

また『文選』では、八箇所の「蚊」が見えるが、うち七箇所は李善の注釈文である。『文選』本文には「蚊」が一回しか見えない。それは『文選』巻五十一による賈誼『過秦論』の中の「蚊蠱」である。李善の注釈によつて、これは『莊子』からの典拠である。また類書でも「蚊」に関する「細かい」表現は見当たらない。

ところが、膨大な唐詩を検証してみると、特に「細」漢字を使つて、「蚊」を表した作者は、白居易と元稹である。⁽⁹⁾では、具体的に白居易と元稹の詩作では、蚊に対して細かい表現がどのように使われていたのか。清少納言は如何に白居易と元稹の詩的なイメージを受け取ったのだろうか。この点については、白居易と元稹の詩句を取り上げて、その表現の特徴を確認してみたい。

『旧唐書』によると、唐の元和年間（八〇六〜八二〇）、白居易と元稹が都の長安を離れて遠くの地方に左遷された。白居易は江州の司馬に務め、元稹は通州の司馬に移った。この頃、二人の間で多くの詩作が唱和された。その唱和詩は、「元和体」と言われ、極めて人気があったそうである。『旧唐書』卷一百六十六、列伝第一百一十六の元稹伝に書いた「二人來往贈答、凡所為詩、有自三十、五十韻乃至百韻者」の通りである。

唐代の通州は現在の四川省に属する場所である。当時の元稹の住居の環境は良くなかったらしい。特に蛇や蚊などが多かったようである。そういう体験から、元稹は、「蟲多詩」というタイトルで、詳しく「巴蛇」、「蜥蜂」、「蜘蛛」、「蟻子」、「蠟子」、「浮塵子」及び「蟲」をテーマとした詩作を書いたのである。そのうち、最も人間を襲う有害な蚊の一種である「蠟子」について、元稹が序文の中で、次のように述べた。引用文は、『元稹集』（中華書局 二〇一〇）による。以下同。

蚊蠟與浮塵、皆巴蛇鱗中之細蟲耳、故嚙人成瘡、秋夏不愈、膏楸葉而傳之、則差。（四人〜四九頁）

蚊蠟と浮塵は、皆巴蛇の鱗中の細蟲のみ、故に人を嚙んで瘡を成す、秋夏愈ず、楸葉を膏してこれを傳す、すなわち癒え。

ここで留意したいポイントは、蛇の鱗の中に集めた蚊蠟と浮塵の小さい虫に対して、元稹は「細蟲」という表現を使用していることである。これは元稹の独特の発想と言えるだろう。また元稹の「浮塵子」（うんか）という虫の詩作では、次のような詩句が見える。

乍可巢蚊睫 胡為附鱗鱗（五〇頁）

詩人によって、浮塵子は蚊の睫に巣をつくることができるのに、なぜ大きな蛇の鱗の中に附着するのか。ここでは蚊類の浮塵子は極めて細い虫が想像される。蚊の睫はぼぼ見えないもので、その上に巣を作ることは不可能である。

清少納言が、大蔵卿の耳の素晴らしさを表現する際に、「蚊の睫」が落ちることも聞こえるという描写は、元稹の細虫の浮塵子の詩句の形象からの独創であろう。つまり、元稹の「視覚」から「聴覚」に変容したのである。

無論、この詩句には、元稹のこのような極めて細い蚊のような虫に対する気持はよくない。なぜなら、人が噛まれると、しばらく治らないからである。まさしく清少納言の「蚊の細声」は「いとにくしけれ」と同感である。

実に、蚊に対する嫌味を書いた人が、もう一人いる。それは白居易である。

白居易が元稹の唱和詩を読んで、元稹の通州の様子を知っていた。友人の苦痛を思つて、次のタイトル「得微之到官後書、備知通州之事、悵然有感。因成四章」で、四首の律詩を書いた。その一の律詩を引用してみたい。引用文は新釈漢文大系（明治書院）による。

得微之到官後書
微子が官に到りし後の書を得て、

備知通州之事
備に通州の事を知り、

悵然有感
悵然として感有り。

因成四章
よつて四章を成す、

來書子細に通州を説く。
來書子細に通州を説く。

州は山根峽岸の頭に在り。
州は山根峽岸の頭に在り。

四面千重火雲合
四面千重し 火雲合ひ、

中心一道瘴江流
中心一道 瘴江流る。

蟲蛇白晝攔官道
蟲蛇は白晝に官道を攔り、

蚊蟻黃昏撲郡樓
蚊蟻は黃昏に郡樓を撲つ。

何罪遣君居此地
何の罪ありてか、君をして此の地に居らしむ、
天高無處問來由
天高くして、來由を問ふに處無し。

(九二三頁)

後に、白居易が自ら「蚊蟻」のタイトルで詩を書いた。白居易は「蚊」のイメージを、元稹の「細虫」と同様に、特に「微細」と言う表現を使用している。全詩を次のように引用する。引用文は『白氏文集』「卷第十一 感傷三」(「新釈漢文大系」明治書院 二〇〇七)による。

蚊蟻

蚊蟻

巴徼炎毒早

巴徼は炎毒早く、

三月蚊蟻生

三月にして蚊蟻生ず。

唾膚拂不去

膚を唾ひて拂へども去らず、

透耳莩莩聲

耳を透る莩莩たる聲。

斯物頗微細

斯の物は頗る微細にして、

中人初甚輕

人の中たる初めは甚だ輕し。

有如膚受譜

膚受の譜の如き有り、

久則瘡瘡成

久しくして則ち瘡瘡成る。

瘡成無奈何

瘡成るは奈何ともする無し、

所要防其萌

要する所は其の萌を防がんのみ。

麼蟲何足道

麼蟲 何ぞ道ふ足らん、

潜喻傲人情

潜かに喩へて人情を傲む。

（六九六〜六九七頁）

右の「蚊蟻」詩は、白楽天が、元和十五年（八二〇）四十九歳で書いた作品で、感傷詩に分類した。白居易の「禽蟲十二章」の序文によると、虫に関する詩は、「多與微之夢得共之」。つまり、虫類の詩作は元稹（微之）と劉禹錫（夢得）とで行われた唱和詩である。前述した元稹の「細虫」の形容と白居易の「微細」の描写は、二人とも蚊に関する表現に「細」の字が使われているのである。

一方、清少納言『枕草子』における「蚊の細声」と「蚊の睫」のような「蚊」に関する細いイメージは、元稹の詩句の「細虫」と白居易の詩句の「微細」と同じ審美と言えよう。

また「蚊」に対する態度は、白居易、元稹、清少納言の、三人とも一致している。例えば、元稹の「蚊蟻」には、もし蚊に刺されたら、暫く治すことはできず、また「蚊」は最も人間の最害の虫と述べている。

白居易と清少納言の「蚊」に対する態度を比べてみると、二人とも蚊に対する気持ちは同様であるところは少ない。ない。

例えば、まず、白居易の「蚊蟻」詩の前半部分の現代語訳を取り上げてみたい（引用文は前同）。

人の皮膚に吸い付いて、払いのけても飛び去らず、ぶんぶん^とと数多く羽音を立てて耳の当りを飛び回る。この虫はかなり微細で、人の皮膚に当たった時の最初の感覚は非常に軽いのだが、それはまるで皮膚の表面に受けただけの誹謗中傷のようなどころがあつて、しばらくすると傷がでてしまったら、もうどうすることもできない。大切なのは、そのごく初期に防ぎとめることである。

次に、『枕草子』「にくきもの」の章段の現代語訳文を掲げてみたい（引用文は前同）。

眠たいと思つて横になつてゐる時に、蚊が細いかすかな声で心細そうにぶんと名のつて、顔のあたりにとびまわるの。羽風までも蚊の身体相応にあるのこそ、ひどくにくらしい。

右の傍線を付けたように、いずれも「蚊」に関する描写については似ているところが多い。白居易は、「飛び去らず、ぶんぶん」と数多く羽音を立てて耳の当たりを飛び回る。」清少納言は、「顔のあたりにとびまわるの、羽風までも」である。何より蚊に関する「細い」の書き方は一致している。それは白居易が「この虫はかなり微細で」、清少納言が「蚊が細い下賜かな声で」というところである。清少納言の「ひどくにくらしい」蚊に対する感情はまったく元稹と白居易と一致してゐるのではないだろうか。

以上のように、清少納言の『枕草子』の中にある二箇所の蚊に関わる細い表現、つまり「蚊の細声」と「蚊の睫」は、白居易と元稹の蚊に関する詩的な描写のイメージと合致していることは明らかである。

また無視できない事実は、『白氏文集』を読まれたことは言うまでもなく、一条天皇が『元稹集』を詠む記録が残されている。例えば、『江談抄』第五「詩事」には、次のような記録が見える。引用文は『新日本古典文学大系』による。

齊名不点元稹集事

又被命云、一条院以元稹集下卷齊名可点進之由被仰之。雖然辞遁云々。

(五二六頁)

齊名、元稹集に点せざる事

また命せられて云はく、「一条院、元稹集下卷をもつて、齊名に点し進るべき由仰せらる。しかりといへども、辞し遁れたり」と云々。

(一七三頁)

中宮定子の女房として、清少納言は、一条天皇の周りの男性貴族、すなわち『枕草子』に登場された藤原伊周、藤原齊信、藤原行成と頻繁に付き合うことによって、知らず知らずにその白居易と元稹の詩句の影響を受けたのである。

そして、白居易と元稹の詩句における蚊に関する「微細」や「蚊睫」の「細虫」の表現によって、蚊に関する「細い」形象から、独特な「蚊の細声」と「蚊の睫」の表現を創出したのではないであろうか。

五 おわりに

以上、『枕草子』における蚊に関わる「蚊の細声」と「蚊の睫」という表現を考察してきた。平安散文にはあまり見えない蚊の表現を、問題点として漢詩文の受容の角度から考証した。『枕草子』前後の文献における蚊に関する「細い」表現は見当たらない。中国の典籍や類書や唐詩を検証してみると、『白氏文集』第十一感傷詩「蚊蟻」による「微細」と元稹の「蟲多詩」による「細虫」の書き方と清少納言の蚊に関する細い表現と合致していることは明らかであった。このように、『枕草子』における漢文受容の方法は、単なる詩句の直接引用だけでなく、詩的な形象を受容する方法と考えることが可能になるのではないであろうか。この点については、今後の研究で新たな課題としてもっと広く展開してみたい。

〔注〕

(1) 四系統『枕草子』本文について、参考した文献及び引用文は、次の通りである。三卷本『枕草子』陽明叢書館書篇「枕草子 徒然草」(思文閣、一九七五)『枕草子』大東急記念文庫蔵(古梓堂文庫旧蔵)複製本(日本古典文学刊行会、一九七四)。松尾聰・永井和子校注『枕草子』新編日本古典文学全集(小学館、二〇〇四)。能因本『能因本枕草子』(上)学習院大学蔵「影印シリーズ」(笠間書院、二〇〇五)。『能因本枕草子』(下)学習院大学蔵「影印複製本」(笠間書院、一九九五)。松尾聰・永井和子校注『枕草子』日本古典文学全集(小学館、一九七九)。前田家本『前田家本枕草子』(前田家尊経閣文庫蔵の写本の複製)(育徳財団、一九二七)。田中重太郎校注『前田家本枕冊子新註』(古典文庫、一九七二)。堺本『堺本枕草子』吉田幸一(古典文庫、一九九六)。田中重太郎校注『堺本枕冊子』改定版(古典文庫、一九五六)。また、田中重太郎『校本枕冊子』一(二)(古典文庫、一九五三)。引用文の後にページ数を示した。

(2) 他の『古事記』と『日本書紀』にある四箇所「蚊」は、次の通りである。引用文は新編日本古典文学全集による。以下同。文末に該当するページ数を示す。①『古事記』下巻・安楽天皇「綿之蚊屋野、多在猪鹿」(三三四頁)②『古事記』下巻・清寧天皇「即、獲其御骨而、於其蚊屋野之東山、作御陵葬」(三六二〜三六三頁)③『日本書記』卷第十・応神天皇「是女人等之後、今呉衣縫・蚊屋衣縫是也」(四九六〜四九七頁)④『日本書記』卷第十三・安楽天皇「是時難波吉師日香蚊父子並仕于大草香皇子」(一三四〜一三五頁)

(3) 『風土記』における二箇所の蚊に関する表現は次のようになる。①『風土記』播磨国風土記「右、称加野者、品太天皇、巡行之時、此処造殿、仍張蚊屋。故号加野」(右、加野と称ふは、品太の天皇、巡り行しましし時に、此処に殿を造りて、すなはち蚊屋を張りたまひき。故れ、加野と号く)(三四〜三五頁)②『風土記』出

雲国風土記「野代海中蚊鳴。周六十步。中央涅土、四方並磯。中央有手掬許木一株耳。其磯有蚊。有螺子・海松。」（野代の海の中に蚊鳴あり。周六十歩なり。中央は涅土にして、四方は並びに磯なり。中央に手掬許なる木一株あるのみなり。その磯に蚊あり。螺子・海松あり）（一五六〜一五七頁）。

(4) 新編日本古典文学全集『風土記』頭注による。

(5) 『万葉集』に見える八箇所の「蚊」は、次の通りである。①『万葉集』卷第二「二三八」番「或本歌一首・并短歌・石見の海 津乃浦乎無美 浦無跡 人社見良米 滄無跡 人社見良目 吉咲八師 浦者雖無 縦惠夜師 滄者雖無 勇魚取 海辺乎指而 柔田津乃 荒磯之上尔 蚊青生 玉藻息都藻 明来者 浪己曾来 以夕去者 風己曾来依 浪之共」(一〇四頁) ②『万葉集』卷第十一「二六二四」番「紅之 深染衣 色深 染西鹿齒蚊 遣不得鶴」(二三二頁) ③『万葉集』卷第十一「二六三一」番「夜干玉之 黒髮色天 長夜叫手枕之上尔 妹待覽蚊」(二三三頁) ④『万葉集』卷第十一「二六四二」番「灯之 陰尔蚊蛾欲布 虚蟬之妹蛾咲状思 面影尔所見」(二三七頁) ⑤『万葉集』卷十一「二六四九」番「足日木之 山田守翁 奥蚊火之 下粉枯耳 余恋居久」(二三九頁) ⑥『万葉集』卷十三「三二二五」番「天雲之 影塞所見 隠来笑 長谷之河者は浦無蚊 船之依不来 磯無蚊 海部之釣不為 吉咲八師 浦者無友 吉画矢寺 磯者無友 奥津浪 諍榜 入り 白水郎之釣船」(三八九頁) ⑦『万葉集』卷十六「三七九二」番「緑子之 若子蚊見庭 垂乳為 母所懷 槎櫂 平生蚊見庭(中略) 結幡之 袂著衣 服我矣丹因 子等何四千庭 三名之綿 蚊黒為髮尾 信櫛持 於是蚊寸垂 取束 举而裳纒見 解乱 童兒丹成見 羅丹津蚊絳 色丹名著来(後略)」(九二頁) ⑧『万葉集』卷十六「三七九四」番「娘子等和歌九首 端寸八為 老夫之歌丹 大欲寸 九兒等哉 蚊間毛而将居」

(九七頁)。

(6)

本文は、新日本古典文学大系による。『三宝絵』中「十七 美作国探鉄山人・美作国英多郡ニ、オホ

ヤケ鉄ヲトル山アリ。帝姫安倍天皇御代ニ、国ノ司民十人ヲ召テ、此山ニノボセテ、穴ニ入テ鉄ヲホラシ

ム。時ニアナノクチクツレ、フタガル。人ヲドロキヲソレテ穴ヨリキヲヒヅルニ、九人ハワジカニイデ、

一人ヲソク出ルホドニ、穴ノクチクツレアヒヌ。国ノ司ナゲキアハレミ、妻子カナシビ泣ク、仏ヲカキ、経ヲ

ウツシテ、卅九日法事修シヲハリヌ。此人一人穴ノウチニキテ思、

我昔法花経カキタテマツラムトイフ願ヲ發セリ。イマダウツシタテマツラズ。我命ヲタスケ給ハ、

カナラズトクカキテマツラム

ト念ズ。穴ノヒマヲヨビサス許通アキテ、日ノ光ワツカニキタレリ。独ノ沙弥アリテヒマヨリ入来リテ、

食物ヲソナヘアタフ。カタリテ云、

汝ガ妻子ノ我ニアタヘツル物ナリ。汝ガウレヘワブレバ、コトサラニ来ツル也。

トイヒテ、又ヒマヨリイデヌ。サリテノチ久カラズシテ、居タルイタゞキニアタリテ、穴ヒラケトホリテ、

ソアララハニミユ。ヒロサ三尺余、高サ五尺許也。

時ニ村人卅余人葛ヲタリニ山ニ入テ、コノ穴ホトリヨリユキスグルニ、人ノソノカゲヲミテ、ヨバヒサ

ケビテ、

我タスケヨ。

トイフ。山人ホノカニキクニ、蚊ノコエノゴトシ。即キ、アヤシビテ、葛ニ石ヲツケテソコニイレテ心見

ルニ、底ナル人ヒキウゴカス。「人ナリケリ」トシリテ、葛ヲムスビテ籠ニツクリテ、葛ヲナヒテ繩ニツケテ

オトシイレツ。底ノ人ノリキテ、ウヘノ人ヒキアゲツ。オヤノイエニキテオクル。家ノ人コレヲミテ、悲ビ

悦事カギリナシ。国ノ司オドロキ問ニ、ツブサニ件ノ事ヲ申。即オホキニタウトビ、カナシビテ、国内ニ知識ヲトナヘテ、是ヨリハジメテチカラヲクハヘテ、其法花経ヲ書タテマツリテ、オホキニ供養ズ。イキガタクシテイキタル事、是法華経ノ願力也。靈異記ニ見タリ（二二三〜二二四頁）。

(7) 引用文は次の(A)、(B)、(C)に分けて取り上げる。(A)『日本靈異記』①下巻「将写法花経建願人断内暗穴頼願力得全命縁第十三(穴の底の人、人影を見て叫びて言はく、「我が手を取れ」と云ふ。山人側ニ聞くに、蚊の音の如し)」(二七九頁)②下巻「用綱漁夫值海中難憑願妙見菩薩得全命縁第卅二(海に漂ひ、波を拒み、力を疲らし、心を惑はし、寐るが如くにして覚むること無し。皎天に覺きて睜れば、身は彼の部内の蚊田の浦浜の草の上に在り)」(三三四頁)(B)『性靈集』①巻第四・為人求官啓「雖然。巨石得舟者過深海於萬里。蚊虻附鳳者翔高天於九空(然りと雖も巨石舟を得つれば深海を萬里に過ぎ、蚊虻鳳に付きぬれば高天を九空に翔ける)」(二五九〜二六一頁)②巻第九・大僧都空海嬰疾上表辭職奉狀「沙門空海言。空海。從沐恩澤竭力。報國歲月既久。常願。奮蚊虻力。答海岳德(沙門空海言す。空海恩澤に沐せしより、力を竭して国に報ずること歲月既に久し。常に蚊虻の力を奮つて海岳の徳を答せむこと願ひき)」(三九〇〜三九二頁)③巻第九・奉造東寺塔材木曳運勸進表「今塔幢材木近得東山。僧等從今月十九日與夫曳運。木大力劣。成功大難。譬如。蟻蝮對車。蚊虻負嶽(木は大きに力に劣にして功を成さむこと太だ難し。譬へば蟻蝮、車に對ひ、蚊虻、嶽を負はむが如し)」(三九三〜三九五頁)④巻第十・綜藝種智院式「或有人難曰。國家廣開庠序。勸勵諸藝。霹靂之下。蚊響何益(或者の曰く、「善いかな」。或は人有つて難じて曰く、國家に廣く庠序を開きて諸藝を勧め勵ます。霹靂の下には蚊響何の益かあらむ)」(四二二〜四二三頁)⑤巻第十・叡山澄和上啓返報書「若使。附龍尾以揚名。寄鳳翼以顯行。則。蚊蝮之質。不勞而凌雲漢(若しくは龍の尾に附いて名を揚げ、鳳の翼に寄つ

て行を顯はさしめば、蚊蝮の質勞せずして雲漢を凌ぎ」(四四〇～四四一頁)(C)『三教指帰』卷下・假名乞兒論「築幻城於五陰之空國。興泡軍於四蛇之假郷。甲蛛蝥網。鎧蟪蝻騎。鼓蝨皮而驚陣。旗蚊羽以標旅(げんじやう)城を五陰の空しき國に築き、泡軍を四蛇の假の郷に興す。蛛蝥の網を甲にし蝻蝻の騎に鎧せり。蝨皮を鼓として陣を驚かし、蚊の羽を旗として旅を標はす」(二二四～二二五頁)。

(8) ここでは、【ア、イ、ウ、エ、オ、カ】を冒頭に付けて、『莊子』における六箇所の蚊に関する表現の特徴を確認したい(傍線は稿者)。本文は、新釈漢文大系(明治書院)による。【ア】『莊子』内篇・人間世第四「夫愛馬者、以筐盛矢、以蜃盛溺。適有蚘虫僕縁、而拊之不時、則缺銜毀首碎胸。意有所至、而愛有所亡。可不慎邪(馬をかわいがる人は(り)つばな)籠にその糞を入れ、おおはまぐりにその小便を入れるほどですが、たまたま蚊や虻が愛馬に止まったとき、いきなり叩くと、馬は驚いてくつわを噛み碎き、首の飾りをこわし、胸の飾りを碎いてしまいます。これは注意が行き届いていながら、愛情に欠陥があるためなのです。(きみの場合もこれと同じで)用心が大切ですな」(二二五～二二六頁)。【イ】『莊子』内篇・應帝王第七「其於治天下也、猶涉海鑿河、而使蚘負山也(天下を治めることは、海を歩いて渡ったり、地面を掘って大河を作ったりするほど(に危険を伴い困難なこと)だ。(それを人為によって治めようとするのは)蚊に山を背負わせるようなものだ)」(二八〇頁)。【ウ】『莊子』外篇・天運第十四「老聃曰、夫播糠眯目、則天地四方易位矣、蚊虻嚼膚、則通昔不寐矣(老聃が意見を述べた。飛ばしたもみ、がらが目にはいると、天地四方がひっくりかえたように(何も見えなく)なりましようし、蚊や虻に皮膚を刺されると、一晩中(かゆかったり痛かったりして)眠れずまい)」(四三七頁)。【エ】『莊子』外篇・秋水第十七「且夫知不知是非之竟、而猶欲觀於莊子之言、是猶使蚘負山、商鉅馳河也、必不勝任矣(且つ又、そもそも是非の限界を知り得ない知力によって、なお且つ莊子の言

葉の意味を考えようとするのは、あたかも蚊に山を背負わせたり、や、すでに黄河を走り渡らせるようなものである。とうていでき得ないことだ」（四八二〜四八三頁）。【才】『莊子』雜篇・寓言第二十七「曰、既已縣矣。夫無所縣者、可以有哀乎。彼視三釜三千鍾、如觀雀蚊虻相過乎前也（孔子がそれに答えた、いや、彼はすでにわずらわされているのだ。一体、心がわずらわされない者であるなら、悲しいという気持などあるはずがないのである。そのような人物になると、俸禄が三釜であろうと三千鍾であろうと、あたかもこの鳥や雀、蚊やあぶが目の前を飛び過ぎるのを見るかのように、その差違によって心を動かすことがないのだ）」（七〇八頁）。

【力】『莊子』雜篇・天下第三十三「由天地之道、觀惠施之能、其猶一蚤一蠅之勞者也（天地の大道の立場から惠施の才能を観察すれば、それはあたかも一匹の蚊や虻が空しく飛び回って働いているようなものである）」（八二五〜八二六頁）。

(9) ここでは五十首の蚊が含まれた唐詩の二句をまとめてみた。引用文は『全唐詩』（中華書局 一九六〇）による。冊数と巻数及びページ数を示した。①韋承慶「螢光向日盡、蚊力負山疲」第二冊・四十六卷・五五七頁。②陳子昂「驅蚊虻之師、忽雷霆之伐」第三冊・八十四卷・九〇八頁。③張說「器留魚鱉腥、衣點蚊虻血」第三冊・八十六卷・九三二頁。④韋應物「蚊虻落其中、千年猶可觀」第六冊・一九三卷・一九八五頁。⑤杜甫「冬溫蚊虻在、人遠鳧鳴亂」第七冊・二二〇卷・二二二七頁。⑥杜甫「氛埃期必掃、蚊虻焉能當」第七冊・二二三卷・二三八四頁。⑦李端「豈意今朝驅不前、蚊虻滿身泥上腹」第九冊・二八四卷・三三三九頁。⑧王建「南中三月蚊虻生、黃昏不聞人語聲」第九冊・二九八卷・三三八六頁。⑨范燈「蚊虻成雷澤、袈裟作水田」第十冊・三〇七卷・三四八九頁。⑩權德輿「醯雞伺晨駕蚊翼、毫端棘刺分畛域」第十冊・三二七卷・三六六八頁。⑪韓愈「雖得一餽樂、有如聚飛蚊」第十冊・三三七卷・三七七四頁。⑫韓愈「我實門下士、力薄蚋與蚊」第十冊・

三四〇卷・三八一三頁。⑬韓愈「朝蠅不須驅、暮蚊不可拍」第十冊・三四二卷・三八三五頁。⑭劉禹錫「沈夏夜蘭堂開、蚊伺暗聲如雷」第十一冊・三五六卷・四〇〇〇頁。⑮劉禹錫「撮蚊妖鳥亦夜起、翅如車輪而已矣」第十一冊・三五六卷・四〇〇一頁。⑯孟郊「蚊蚋亦有時、羽毛各有成」第十一冊・三七四卷・四〇二五頁。⑰孟郊「五月中夜息、飢蚊尚營營」第十二冊・三八〇卷・四二六〇頁。⑱元稹「未飽風月思、已為蚊蚋圖」第十二冊・三九七卷・四四五八頁。⑲元稹「蚊蟻與浮塵皆巴蛇鱗中之細蟲耳」第十二冊・三九九卷・四四七四頁。⑳元稹「乍可巢蚊睫、胡為附鱗鱗」第十二冊・三九九卷・四四七四頁。㉑元稹「蚊聲靄窗戶、螢火繞屋梁」第十二冊・四〇三卷・四五〇二頁。㉒元稹「索綆飄蚊蚋、蓬麻整舳艫」第十二冊・四〇七卷・四五三二頁。㉓元稹「卒章還慟哭、蚊蚋溢山川」第十二冊・四〇八卷・四五三五頁。㉔元稹「不堪堤上立、滿眼是蚊蟲」第十二冊・四〇九卷・四五四七頁。㉕元稹「蚊幌雨來卷、燭蛾燈上稀」第十二冊・四一〇卷・四五五三頁。㉖元稹「司馬見詩心最苦、滿身蚊蚋哭煙埃」第十二冊・四一五卷・四五九〇頁。㉗元稹「蚊螭與變化、鬼怪與隱藏」第十二冊・四一八卷・四六〇九頁。㉘白居易「遶耳薨薨聲、斯物頗微細」第十三冊・四三四卷・四八〇五頁。㉙白居易「蟲蛇白晝攔官道、蚊蚋黃昏撲郡樓」第十三冊・四三八卷・四八八九頁。㉚白居易「魚蝦遇雨腥盈鼻、蚊蚋和煙癢滿身」第十三冊・四三八卷・四八七二頁。㉛白居易「蚊蚋經冬活、魚龍欲雨腥」第十三冊・四四二卷・四九三七頁。㉜白居易「林靜蚊未生、池靜蛙未鳴」第十四冊・四五二卷・五一一〇頁。㉝白居易「螻螻殺敵蚊巢上、蠻觸交爭蝸角中」第十四冊・四六〇卷・五二四五頁。㉞雍裕之「蚊眉自可託、蝸角豈勞爭」第十四冊・四七一卷・五三四九頁。㉟李紳「鳳儀常欲附、蚊力自知微」第十五冊・四八三卷・五四九四頁。㊱殷堯藩「鷹拳擒野雀、蛛網獵飛蚊」第十五冊・四九二卷・五五六五頁。㊲施肩吾「池邊道士誇眼明、夜取螭蝦摘蚊睫」第十五冊・四九四卷・五五九三頁。㊳張祜「雨氣朝忙蟻、雷聲夜聚蚊」第十五冊・五一〇卷・五八一四頁。㊴項

斯「蚊蚋已生團扇急、衣裳未了剪刀忙」第十七冊・五五四卷・六四二四頁。④薛能「退紅香汗濕輕紗、高捲蚊
 廚獨臥斜」第十七冊・五六一卷・六五二〇頁。④皮日休「雨工避罪者、必在蚊睫宿」第十八冊・六〇九卷・七
 〇二七頁。④皮日休「松扉欲放如鳴鶴、石鼎初煎若聚蚊」第十八冊・六一四卷・七〇八六頁。④羅隱「蠅蚊漸
 無況、日晚自相親」第十九冊・六六〇卷・七五七六頁。④羅隱「蠅蚊猶得志、簾席若為安」第十九冊・六六一
 卷・七五八三頁。④羅隱「蚊蚋有毒、食人肌肉」第十九冊・六六五卷・七六一〇頁。④唐彥謙「俯仰歲時久、
 帖然困蚊蠅」第二十冊・六七一卷・七六七六頁。④唐彥謙「蚊蠅如俗子、正相妒嫉」第二十冊・六七一卷・七
 六七八頁。④韓偓「不道慘舒無定分、卻憂蚊響又成雷」第二十冊・六八〇卷・七七八九頁。④吳融「天下有蚊
 子、候夜嚙人膚」第二十冊・六八七卷・七九〇二頁。④韋莊「蚊吟頻到耳、鼠鬥競綠臺」第二十冊・四九六卷・
 八〇一四頁。

右に示した①～⑤の唐詩における蚊の表現を確認してみた。詩語としてのフレーズは、沢山使われていた「蚊
 蚋」（②④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝）と言えるだろう。この「蚊蚋」は、『大漢和辞典』によると、
 「ブンゼイ か。蚋も亦蚊。白鳥。（説文、蚊、段注）秦晉謂之蚋、楚謂之蚊。（大戴禮、夏小正）丹鳥羞白
 鳥、丹鳥者謂丹良也、白鳥者、謂蚊蚋也」（一〇四四八頁）。このように、また蚊のなきこえ、蚊のまつげ、
 蚊の微力で重任に耐えない喩の蚊に関わる表現である。十分注意したいことは、白居易（⑳）と元稹（㉑）
 の詩句には、ユニークな「微細」と「細虫」と書いてある。しかもこのような「細」の字を使ったのは、白居
 易と元稹の詩句にしかみられない特徴である。

